

## 東南アジア研究センター 1966年度第1・四半期報告

東南アジア研究の第1期5カ年計画は、この4月から第4年度に入った。ここに、6月末にいたるまでの、1966年度第1・四半期の活動状況を要約報告しよう。

**調査研究計画**の社会科学部門のうち、タイ国地域調査は、ビルマ国境のメーサリエンに夫人とともに定着する飯島茂助手(東南ア研)、および東北タイのドンデーグ部落にとりくんでいる水野浩一研修員(東南ア研)によってつづけられている。さらに5月には隷農制および農奴制の崩壊過程にかんする研究のため、石井米雄助教授(東南ア研)がタイに赴いた。なお石井助教授は本年度いっぱい**バンコク連絡事務所**の責任者となる。エンダウの非回教マレー部落に定着調査していた前田成文大学院学生(文)の5月の帰国でもって、現地におけるマレーシア地域調査は終了した。政治班の神谷不二教授(大阪市大)は動乱のインドネシアにおける調査を6月におえた。

自然科学部門の現地研究は、本年度も活発に行なわれる予定であるが、その第一陣として、福井捷朗大学院学生(農)が、みたびタイに出発、水稲にかんする植物栄養学的研究にとりかかった。

現地研究の成果としての京都における**研究例会**はきわめて順調につづけられ、6月23日の研究例会をもって第100回に達した。

**養成計画**としての1966年度留学生3人は第2・四半期にそれぞれ留学国に赴く予定になっている。本年度奨学会受給者として、水野浩一(東南ア研)、坪内良博(文)、高谷好一(工)の3名が採用された。しかし、5月1日づけで萩野和彦助手の農学部への配置がえにともない、坪内研修員は東南ア研助手に任用された。

**交換計画**としては、私が3～4月渡米、HRAF 理事会に出席するとともに、フォード財団をはじめ、いくつかの大学を訪問した。5月にはフォード財団の新理事長 McGeorge Bundy 博士が入洛、6月にはインディアナ大学副総長 Lynne L. Merritt 博士の来訪があり、その他多くの内外の専門家がセンターを訪問した。

第4年度からは、第1～3年度にかわって、現地調査よりも、いずれかという**出版計画**に重点がおかれる。東南アジア研究双書第1巻として、マレーシア地域計画のリーダーであった故棚瀬襄爾博士の遺稿『他界観念の原始形態』を刊行、博士の霊前に供えることができた。また『東南アジア研究』第3巻第4号(水資源利用に関するシンポジウム特集号)および第5号を刊行し、この季刊誌のおくれをほぼとりもどした。

**図書資料整備計画**も予定どおり進んでいるが、資料室の充実が切に望まれる。

いま、第4年度のスタートをきるにあたって、われわれはこれからは第1期5カ年計画の成果のとりまとめに全力をそそぐことを明記しておきたいと思う。

1966年6月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍